

# 新潟県の帰化植物 侵入・繁茂時期 (その1) アレチウリ

石 沢 進

近年多くの帰化植物が県内各地に見られるが、いつ県内に侵入してきたか、知りたいところである。本誌で、帰化植物の侵入・繁茂の時期を探ってみたいと思い、今回アレ

チウリ *Sicyos angulatus* L.を取り上げてみた。会員の皆様の中にも帰化植物に詳しい方もおられるので、掲載した時期など違う情報を知っておられたらご教示ください。

## 外来のつる状「アレチウリ」

# 植物の敵発見 在来種ピンチ!



## 繁殖力強く駆除困難

小千谷周辺 信濃川流域 市など対策に大慌て

植物を枯らすなど生態系に悪影響を及ぼす外来のつる状の草が、北魚川口町から小千谷市の信濃川流域にかけて繁茂していることが確認された。同市や建設省信濃川工事事務所などが、このほど合同で実施した河川パトロールで見つけた。これといった有効な駆除方法のない厄介な草だけに関係者は対策に頭を痛めている。

この草は、北アメリカを原産地とする一年生つる植物のアレチウリ(ウリ科)で、増殖力が強く、ほかの植物や木にも、びっしりからみついては枯らしてしまふ。日本では、昭和二十七年に静岡県清水港で初確認されたが、本県では、三年前に中野妙高村の奥地で、わずかに確認された以外は繁殖の例はない、とされてきた。

しかし、今回、市街地に近い河川公園などで見つかったことで関係者は大慌て。「信濃川上流から種子が流れてきたか、野鳥が運んできたか」と、侵入ルビっしり生い茂ったアレチウリ。繁殖力が強く植物を枯らす厄介者だ

新潟日報 1997・11・12

野原では、以前からアレチウリに悩まされてきたことが分かった。例えば、一昨年、特異な生態を持つチョウ「コムラサキ」の集団生息地(長野市安茂里の犀川左岸)にアレチウリが繁殖し、五輪ボランティヤを大盤動員して刈り取ったこともあった、という。

こうした事例から見ても、同工事事務所では「一人海戦術で根を抜き取り、焼却するのが一番いいようだ」と言い、取りあえず降雪前までに、各出張所に突

上越市の上越教育大では、十年度の「学生募集第Ⅰ項」を同大入学試験係で配布している。

募集するのは、10年度は、学校教員等部初等教育科、上越教育員養成課程の学生生二百人。出願締め切りは、前期日程および後期日程が十年二月四日、推薦枠が九年十二月十八日、私立外国人留学生態を調査してもらい、来年に備えることになっている。

アレチウリの繁茂については、本誌25号(1999年)でも掲載したが、最初に県内で発見された時期、それに関する記録については明らかでない。池上義信先生の「新潟植物記」(未発表)には以下のような記録が残されている。

アレチウリ 村上[工藤], 柿崎海岸[吉川純幹 29回展(1965)], 柿崎[吉川純幹 31回展(1967)], 北長岡信濃川畔[笹岡茂 学校への坂道 2: No.18: 80(1977)]

cf. 清水港[大村敏朗 -杉本順一 植物研究雑誌 28: 372(1953)]

会津北部(塩川町)[斎藤 慧 植物採集ニュース 12: 6(1964)]

茨城那珂川[宮崎方夫 フロラ茨城 26: 3(1964)]

池上先生の記録で、県内の最も古い年代が柿崎海岸の1965年である。工藤孝雄氏の村上の記録がそれ以前の可能性があり、より古い確認時期が更新されるかもしれない。広く繁茂して注目されるようになったのは、1977年10月21日の笹岡氏の記録に「信濃川畔に優占種といってもよいほど生えていた」と記しているように、この頃にすでに群生していたところがあったと推察される。つまり、

県内における本種の広がり、1960年代に侵入して、1970年代に広く繁茂した可能性が高い。1997年の新潟日報の記事に見るように、信濃川河川における本種の広がりには驚くべき状況に達したとみられる。

なお、本種の我が国における最初の発見は、1953年の大村敏朗氏の清水港であり、ほぼ10年後に新潟県でも広がり始めたと推察される。国内の福島や茨城のように1960年代に分布が確認されるようになり、新潟と同じ頃のようなのである。

近年の信濃川畔の本種の繁茂も以前ほどひどくないようにも思われるが、断片的な観察であり、その後の消長を知りたいものである。

会員の方には、アレチウリに限らず県内の帰化植物の動向について本誌に寄稿頂きたい。例えばセイタカアワダチソウの広がりや住んでおられる地域で以前と様相を異にするようであれば、その情報提供をお願いしたい。

藤塚治義・中野雅子(1999) 信濃川河敷のアレチウリ 新潟県植物保護 第22号: 4-7.

鳥 野 業 斤 日 月 享

2006年(平成18年)5月26日 金曜日 43150号 (日刊) ▲

天声人語

木の皮を煮たり漬けたり裂いたり、長い時間をかけて糸にする。それを織って布にし、帯や帽子に加える。山形・新潟県境の山村で、70人ほどの女性が受け継いでいる「羽越しな布」づくりは、縄文、弥生を思わせる技術だ。▼昨年、国の2007年度の「伝統的工芸品」に指定された。まごめ役を務めている五十嵐勇喜さん(70)は「公に認められたことで、後継者を育てていく自信がわいてきた」と話す。喜びの一方で、指定に伴って行われる予定の「伝統工芸士」の試験を受けようという人が一人もいないことが悩んだ▼経済産業省の外郭団体の「伝統的工芸品産業振興協会」が実施している試験は、実技とペーパーテストがあり、それぞれ70点以上とらなければ不合格となる。羽越

しな布に携わる人たちの平均年齢は約70歳。「40年ぶりとか50年ぶりに筆記試験と言われても、尻込みする者がほとんど」だという▼正倉院は何県にあるか、室町時代の工芸品は何か、伝統的工芸品を所管しているのは何省か。かなりの難問ぞろいだ。全国の伝統的工芸品の産地でも、合格者が数人しかいないところが少なくない▼あくまで名譽的称号で、経済的恩恵がないのに試験を受けるのは面倒だという声が各地で聞かれた。長老が受けないと若手が受けづらいいことも、受験者が増えない一因のようだ▼「落とすための試験ではない。勉強するいい機会として受けてほしい」と協会は説明するが、伝統技術を受け継ぐ人たちに筆記試験が本当に必要なのかどうか。現在のやり方はかなり疑問に思える。